

葉に手向の歌を被書付、是を御硯蓋にのせ、内侍持出て藏人に被渡、藏人請取て是を七夕に備るなり。御殿の棟へ上る也。御硯調やう廣蓋に御硯石計七ツ、御筆墨あり。○圖御歌被書付て後其かちの葉に供物を包、其上を紙のひねりにて十文字に結なり。供物は秋の景物などやうのもの也。委は不反見、此外不知爲指事。

〔禁中近代年申行事〕七月七日夜七夕祭 常の御殿御庭に三間四方程に四角に、ゑだ付の竹長サ七八尺程ふとさ五寸廻り程、上に小なわを四方に引、御前の方のなわに、五色のきぬ糸かけさげる。竹四方の内にはこもを敷、御ゑんがわに高つくへ有、其上にばり、糸あふぎ、笛をおき、あこだうりを皮ともに輪切にして、かわらけ七ツに入臺にのせ、しほあわびを切、かわらけ七ツに入臺にのる。がちの葉、ひさごの葉をしき、此上にはすの花をむじりおく。御ゑんにもこもを敷、づのだらひに氷いのほい入おぐ、御燈七ツともし、御ぐわいししまくの上にあり。

〔日次紀事〕七月七日 扇子禁裏賜扇子於諸親主及女中、高貴童形人、金銀茅輪一雙以絲結之、懸衣領之間，其中有兩尊親之人則用茅輪兩箇至晦日而止。

〔左經記〕長元元年七月六日己亥及晚景參殿依御出權辨云宮○後一條中宮藤原威子、乞巧奠祭可有歟如何尋先例延長間天內有穢猶被祭又御讀經修法僧等雖祭日不退出但御服時被祭之例不見天曆八年諒闇時有祭以此由等還御申事由可被示也者權辨諾畢、七日庚子早旦權辨相示云、乞巧祭可被停止之由有仰者仍召仰屬爲信畢。

〔知信朝臣記〕天承三年七月七日夜有乞巧奠事下官依爲行事著束帶參宮供奉奠物其儀口畫御座庭中掃部寮敷葉薦三枚其上施長筵東西妻件机木工寮進之而依異之、北三脚居十六抹色自見二南二脚中央橫置擎一張南西机辰巳角居火取一口有名香、焚其西敷楸葉一枚婉置五色糸其西敷同葉盛蓮南東机未申角居御鏡一面開蓋其東敷楸葉一枚差金銀針各二、穿五色糸其東敷同葉又盛蓮花立燈臺九本三行立之北廊北砌内掃部寮司敷帖爲侍等通夜座諸司看打敷之、